

「美月の夢」の教材としての価値

——「沼田さん」との関わりに注目して——

森 田 悠 一

はじめに

小学校の国語教材の中には、新美南吉の「ごんぎつね」のように長きに渡って教科書に採用され続けているものがある。一方、採用されてからまだ数年しかたっていない新しい教材もある。

そのような新しい教材は先行研究も少なく、どのように扱えばよいか現場の教師も手探りで授業を進めていることと思う。教材としての価値はどこにあるのか、その教材で何を教えるべきか、効果的な指導法は何か、といったことは、確立されるまでにある程度の時間を要する。

それにも関わらず、これまでにはなかった新しい教材が教科書に加えられる意義は何か。その答えの一つは、子どもたちの現状や、時代の変化に対応することであろう。本論で取

り上げる「美月の夢」も、そのようなねらいをもっているのではないかという仮説をもとに、「美月の夢」の教材としての価値は何かを考えることにする。

一、作者と作風の新しさ

「美月の夢」は教科書のための書き下ろし作品で、教育出版の『ひろがる言葉 小学国語6上』（注¹）に、二〇〇二（平成一四）年度版から掲載された。
作者の長崎夏海は、教師用指導書（注²）では次のように紹介されている。

一九六一（昭和三六）年、東京都に生まれる。都立城北高校卒業。二十歳代半ばで、現代の中学生たちを新鮮に描いた長編『A DAY』（八六 アリス館）でデビ

ユーし、注目される。

その後は、幼年向きと、小学校高学年から中学生向けの、二つの読者対象年齢に向けて、いずれも日常的な感覚を鋭敏に生かした作品を継続的に発表している。

「現代の中学生たちを新鮮に描いた」という言葉があるが、デビュー作に限らず、長崎夏海の作品には現代社会の問題が反映されている。

例えば、『トウインクル』（注3）、『悪魔とドライブ』（注4）、『青い惑星』（注5）、『空にふく風』（注6）といった最近の作品には、次のような共通点が見られる。

まず、どの作品も、主人公の家庭には父親の姿がない。離婚していたり、別居していたりと様々だが、基本的には母親と二人で暮らしている。

そして、主人公は不登校だったり、無気力だったり、それぞれ悩みや問題を抱えている。母親との関係もうまくいっておらず、会話もほとんどない。主人公の悩みや問題が改善に向かうのは、すべて友人や知人との関わりがきっかけとなっている。完全に解決するところまでは描かれないが、問題解決への希望が見えるような終わり方となっている。

このように、長崎夏海の作品には、現代社会の抱える問題や、悩みを抱えた孤独な思春期の少年の姿が描かれているのである。

悩みを親に相談するのではなく、それ以外の人との関わり

によって解決していくという点は「美月の夢」とも共通するものである。「美月の夢」には家族が登場しないので、美月の家庭の様子は分からないが、親との関係の希薄さという点で、長崎夏美作品の大きな特徴を備えているといえる。

このような作品は、かつての教科書教材には見られなかったものであり、近年の傾向といえる。

時代の変化と共に、現実の子どもたちと、作品に登場する子どもたちとの間には、どうしてもずれが生じてくる。現行の物語教材の背景や扱っているテーマも、現代の子どもたちになじみのないもの、子どもたちの現状と合っていないものが多い。

もちろん、時代が変わっても普遍的な価値を認められている教材もあり、過去の作品の時代背景を考えることも重要であるが、時代の流れに合わせ、現代の子どもたちにふさわしい教材を模索していくことも重要である。「美月の夢」も、そのような新しい時代の教材として選ばれたのではないだろうか。

このように考えたのは、「美月の夢」から、高齢化社会などの現代社会の問題を教材に反映させたいという、教科書編集者の意図が感じられるからである。ただ、奇妙なことに、それについては教師用指導書では明確には触れられていない。

そこで、この問題については第三章で詳しく述べることに

し、次章では、まず教師用指導書が「美月の夢」をどのような作品として理解しているのかを述べる。

二、教師用指導書における記述の問題点

教師用指導書（前出）では「美月の夢」について「作品の特徴」の項で次のように解説している。

本教材「美月の夢」は、読み手の子供たちと同じ六年生である美月の「将来の夢」を考える物語である。（中略）「美月の夢」は、まだはつきりとした未来が描けていない子供たちに、「あわてることはないよ。どんな生き方をしたいのか、まず考えてごらん」ということを教えてくれる作品である。（中略）

美月の自分の夢に対する変化を読み取ることをとおして、自分自身の生き方や考え方を振り返るきっかけになればよいであろう。そして、読み手の子供たちにも、今の自分の「すてきな夢」を見つけていってほしい。（注7）

美月が六年生であるということは教科書本文から断定はできないが、卒業を一年後に控え、将来について考え始める時期の子どもたちにとって、興味深いテーマを含んだ作品であることは確かである。

ただし、ここで述べられていることは「将来の夢を考える」「生き方を考える」ということであり、国語教育というより

は進路指導に近い。「自分自身の生き方や考え方を振り返るきっかけ」にするのは、国語の学習ではなく、「美月の自分の夢に対する変化を読み取る」ことが国語の学習としてまず行うべきことである。

「将来の夢を考えること」は意義のあることであり、作品の要素の一つには違いないが、それだけでは国語の教材としてこの作品で何を教えたいのが曖昧である。つまり、「読むこと」の学習に、美月の人物像の描かれ方をどのように生かすかということが考えられていないのではないだろうか。

同様に、「主題について」の項でも、進路指導的な説明が繰り返されている。

この作品の主題は、「人間にとって本当の夢とは何か」ということである。（中略）夢とは、「何かになりたい」というような画一的なものではない。人との心のふれ合いに支えられながら育まれるもの、「こんな生き方をしてみたい」と喜びをもって語られるもの、それこそが「すてきな夢」なのである。（注8）

この「人間にとって本当の夢とは何か」ということも、現代社会の状況と関連があるように思われる。近年、フリーターやニート、モラトリアムなどという言葉に代表されるように、自分のやりたいことが見つからない若者の増加が問題となっている。教科書編集者はそのような社会の現状を踏まえ、このようなテーマをもった作品を取り上げたのではないかと

思われる。

では、教師用指導書に書かれているような主題を読み取れば、「美月の夢」を教材として生かしたことになるのであろうか。先ほども書いたように、進路指導は国語科教育とは別物である。

指導書のいう「主題」を読み取るとは確かに作品を理解する上で重要であるが、それでは読解として浅いものになってしまうのではないだろうか。作品を進路指導的なの一つの「主題」で理解するという、一面的な見方しか示されていないところに、問題があるように思われる。

三、高齢者との関わりという視点

第二章で述べたように、教師用指導書では「人間にとつて本当の夢とは何か」が「主題」とされている。そのため、この作品の重要な登場人物である、沼田さんのことがなおざりになってしまっている。「沼田さんとかかわりをおして」(注9)などの形で言及されているが、この解説では過程よりも結果である「夢」に注目した読み方が強調されている。

しかし、もし「本当の夢」について考えることだけが重要であれば、養老院に住む沼田さんを登場させる必要はなく、もっと身近な人物でも良かったはずである。沼田さんを登場させたのは、高齢者との関わりについて考えさせるといふも

う一つのねらいがあったのではないだろうか。

高齢化社会も今日的な問題の一つであるし、核家族化によつて高齢者と子どもの関わりが減ったことも現代社会の特徴である。

教師用指導書では、「総合的な学習の時間などで、ボランティア活動として、福祉の問題を考えることにも通じる」(注10)と書かれており、国語の学習とは別のところで高齢者との関わりということが意識されている。

しかし、沼田さんという高齢者との関わりは、読解の上でこそ重要である。

美月は最初の場面では、「夢」という言葉から、「サバンナ、砂ばく、白夜の街」などの行ってみたい場所、「オーロラ、ピラミッド、海の中の世界」などの見たいものを思い浮かべる。

ところが、夢とは職業のことだという同級生の言葉を聞いて、そのイメージは消えてしまう。自分には夢がないのではと悩んだ美月は、将来への不安を感じる。

そのような美月の不安は、手紙を通しての沼田さんとの関わり、沼田さんの気持ちや夢を考えることによつて消え、最後の場面では、

いろいろな所へ行くことだって、すてきな夢だ。

いろいろなものを見て、いろいろな人に出会いたい。

今は、それが、美月の夢だ。

という風に変化している。いろんな所へ行きたい、いろんなものを見たい、という思いは、それまでも美月の中にあるものがある。それを、自信をもって「すてきな夢だ」と思えるようになったことが大きな変化である。さらにそれだけでなく、「いろんな人に出会いたい」が加わっていることにも注目したい。

美月は、沼田さんとの関わりを通して自分の考えが変化し、成長することができたという体験から、人との出会いの大切さに気づいたのである。やりとりをした相手が、普段関わることの少ない、高齢者の沼田さんだったからこそ、人生を良く知っている人だったからこそその気づきである。

そう考えると、「美月の夢」の主題を「本当の夢」一つに絞るのではなく、高齢者との関わりという、もう一つの視点からも読み取っていく必要がある。

だからといって、沼田さんを、単純に「高齢者」として軽くくつてしまうのは問題である。他の老人たちではなく、個性を備えた沼田さんだったからこそ、美月に影響を与えることができたのであり、読解の際は、沼田さんの人物像に注目しなければならない。

四、沼田さんの人物像

美月は直接沼田さんに会ったことがないため、沼田さんか

らのはがきと、沼田さんを知る桜林園の園長さんからの手紙だけが、沼田さんの人物像を知る手掛かりとなる。

美月が一年生の頃、桜林園のおじいちゃん、おばあちゃんにはがきを出したとき、だいたいこの人の返事は、

「このくらしは、たのしいですよ。みづきちゃんも、たくさんあそんで、たくさんべんきょうしてください。」というごく普通の内容であり、読みやすいように平仮名で書かれていた。

それに对し、沼田さんのはがきは、

「楽あり苦あり、それが人生。美月さんは、富士山のよう大きく、たおやかな人になるでしょう。」

という、大人向けに書かれたようなものであった。

それを讀んだ美月は、「かっこいい」「急に自分が大人になったみたい」だと感じる。美月にとって沼田さんは、自分も子ども扱わず、成長させてくれる人物であり、だからこそ沼田さんとだけやりとりが続いたのである。

沼田さんのはがきの文面が、いつも同じということも大きな特徴である。文面が変わらないことは、安定感を感じさせる。美月は、沼田さんは人生を良く知っており、人生や生き方について、はっきりとした自分なりの考えをもっている人だと感じたことだろう。将来の夢に悩む美月とは、対照的な人物としてとらえていると思われる。

美月のはがきの文面は毎回違うが、最後はいつも、「沼田

さんは、大きな木のような人になるでしょう」で終わる。沼田さんの真似をして書いたため、少しおかしな文であるが、美月にとって沼田さんは、頼りになる大きな存在であることが分かる。

沼田さんを知るためのもう一つの手掛かりである園長さんの手紙には、沼田さんが美月のはがきをとでも大切にしていたことが書かれている。

同封されていた沼田さんの最後のはがきは、字が震えており、「美月さんは」でとぎれていた。手の自由が利かないような状態であっても書こうとしていたのである。会ったことのない美月に、なぜそこまでしてはがきを書こうとしたのだろうか。もちろん、美月からの返事を楽しみにしていたというのがあるが、毎回同じ文面であることには、他の理由があるに違いない。

最後に美月は、「富士山のような人」は沼田さんの願いであり、沼田さん自身の夢だったのかもしれないと感じる。沼田さんは、はがきを通して、自分の夢を若い美月に託そうとしていたのではないだろうか。そう考えると、実際に会ったことのない美月に、毎回「富士山のように大きく、たおやかな人になる」と書きつづけたのも納得がいく。

はがきの文面は毎回同じであっても、美月は「読むたびに、ちがう気持ちになった」という。沼田さんの夢は、美月が成長していく中で、指針のようなものになっていたのであろう。

最後の場面の風景描写は、

屋上の西側のすぐそばに、どっしりとしたかしの木がある。新しい緑の葉を上げらせていて、前に見たときよりもぐんと近くに見えた。

となっている。このかしの木は、「大きな木」、すなわち沼田さんを表していると読むことができる。「沼田さん自身の夢」という新しい発見をした美月は、沼田さんをより近くに感じられるようになったことが分かる。

五、「美月の夢」の教材としての価値

これまで見てきたように、教師用指導書の理解には二つの柱がある。一つは、将来の夢を考える作品であるということ、もう一つは、高齢者との関わりを考える作品であるということである。

しかし、この読みの内実についての説明内容は、両方とも極めて浅い。その理由は、「美月」という個性と、「沼田さん」という個性が、ともに理解できていないからである。少女と高齢者であれば誰でもいいのではなく、この二人でなくては表現できなかったものを明らかにしていくことが読解である。

例えば北村夕香^{きたむらゆか}は、長崎夏海作品の登場人物について次のように述べている。(注11)

長崎夏海の作品の魅力を一言で言い表すとしたら、「魂の濃い顔をした登場人物たち」という言葉に尽きるだろう。

処女作『A DAY』（アリス館 一九八六）の影響で、長崎夏海といえは、アウトサイダーを描く作家という印象が強い。長崎夏海の描くアウトサイダーたちの姿には、既存の作家にはない説得力があった。だから、皮肉なことに、読者のイメージの中で、知らない世界を見せてくれる扉的な役割を持たされることとなってしまったのである。

「アウトサイダー」という言葉は、第一章で述べたような長崎夏海作品の主人公の特徴をさしている。美月は「アウトサイダー」というほど社会から離れてはいないが、周りどこか違っている点、悩みを抱えている点は共通している。美月は同級生達のように夢についての作文を書くことができず、要領よく仕上げる方法は分かっているけれども、それをしないで自分自身を見つめることを選んだ。

北村のいう「知らない世界」とは、不良の世界のようなニユアンスも含んでいると思われるが、作品群が示すように、それは自分自身や生き方について考えることでもある。その意味では美月もまた、思春期の読者に「知らない世界を見せてくれる扉的な役割」を持っているのである。

具体的な夢を持っているか、いないか、というレベルでは

なく、美月が自分自身を見つめ、自分の中にあつたものを再発見したことが重要である。北村が「魂の濃い顔の登場人物たち」と表現しているが、これまで小学校の物語教材で、美月のように自分自身を見つめ、生き方について考えた主人公はいなかったのではないだろうか。この新しさは、この教材の大きな価値であるといえる。

では沼田さんはどうであろう。沼田さんもまた、周りとは違つたかなり個性的な人である。他の老人たちと同じようなことは書かず、毎回「富士山のような人」と書き続けたのは、沼田さんが一つの信念を持った人だからであると考えられる。そのような、生き方としての「夢」を持つていたからこそ、美月に自分の「夢」を気づかせることができたのである。

これまでの教材には、例えば「桃花片」（東書・小六・昭和四十九）の陶工や「海のいのち」（光村／東書・小六・平成八）の漁師たちのように、職業人としての生き様を感じさせる大人はいいた。しかし沼田さんのような生き方としての「夢」を持った大人は登場していないように思われる。具体的な職業を例に描かれた、職業人としての誇りや心意気に比べ、具体的な職業の分からない沼田さんの言葉は抽象的かもしれない。しかしそれは、一つの型を示すのではなく、将来への視野を大きく広げ、美月の心を解放するものである。沼田さんがもし従来の教材に登場する職業人のような人物であれば、このように美月の心を解放することはできなかった

あろう。

「美月の夢」のような教材の登場は、先に述べたような職業の多様化や、やりたいことの見つからない若者の増加といった社会の現状を反映しているのではないかと考えられる。

このように見ていくと、登場人物の個性、悩み、関わり方など様々な点で新しく、現代の六年生にふさわしい教材であることが分かる。その新しさの中で、「夢」や「高齢者」といった分かりやすい部分にだけ注目するのではなく、美月と沼田さんの人物像に注目して読むことが重要である。単に「夢にはこのような形のものもある」と説明するのではなく、沼田さんとの関わりによって美月が自分でそれに気づくところに、この教材の価値がある。

文学作品を読むことは、様々な人生を経験することに似た効果をもっている。現実世界では、核家族化や地域社会の変化によって児童が家族以外の大人と関わる機会が少なくなっている。文学作品から登場人物の考えや人物像を読み取ることによって、様々な人との出会いや関わりを疑似体験できる力をつけることは、今後ますます重要となってくる。

美月が沼田さんとの関わりによって変化したように、児童もこの教材から沼田さんの人物像や考え方を読み取ること、自分の考えを広げることができる。美月と沼田さんとの関わりは、児童と文学教材との関わりでもあるのである。

注

- (1) 木下順三・今西祐行 ほか40名「ひろがる言葉 小学国語6上」教育出版株式会社 平成十七(二〇〇五)年
- (2) 教育出版株式会社編集局編「ひろがる言葉 小学国語 教師用指導書 研究編 6上」教育出版株式会社 平成十七(二〇〇五)年
- (3) 長崎夏海「トウインクル」杉田比呂美画 小峰書店 平成十一(一九九九)年
- (4) 長崎夏海「悪魔とドライブ」神山ますみ画 小峰書店 平成十三(二〇〇一)年
- (5) 長崎夏海「青い惑星」鈴木びんこ画 学習研究社 平成十三(二〇〇一)年
- (6) 長崎夏海「空にふく風」佐藤真紀子画 汐文社 平成十五(二〇〇三)年
- (7) 注2と同。四八頁
- (8) 同。四九頁
- (9) 同。四八頁
- (10) 同。四九頁
- (11) 北村夕香「作品論『夏の鼓動』(長崎夏海)」『日本児童文学』(日本児童文学者協会)第四七巻第三号 平成十三(二〇〇二)年 四二～四五頁

(もりた・ゆういち 本学修士課程二年)